

empty body

The Last Night

空気が澱んでいる 田樹川神楽たきがわ かぐらの、それが第一印象だった。

古ぼけた安アパート。細い廊下を挟む壁、天井もろとも塗料はところどころ剥げ落ち、寿命が近いらしい蛍光灯がチカチカと明滅を繰り返す。屋根があるだけマシな方だ。地を叩く雨音は荒れ、止む気配など微塵もない。

廊下の左右の壁に並ぶドアはどこも表札などない。どうせどこぞの違法入国者だろう。ビザが切れた者や密入国した者、理由は様々でも風当たりは一樣に強い。にもかかわらず、違法入国者・滞在者は一向に減ろうとはしない。むしろここ数年で過去最高の増加を示している。

彼らにとっての魅力とは何だろう？

それにしても、空気が澱んでいる。

右手に握ったサブマシンガンが、明滅する蛍光灯に大人しく照らされる。物を壊すためだけに生み出されたそれは、安アパートの空気に妙に溶け込んでいた。

神楽のブーツが地を叩く足音は、湿った空気に鈍く鳴る。

RRRRR……！

目的のドアを見付けたのと、電話の着信音が聞こえたのは同時だった。ドアの脇で足を止める。着信音は目的のドアの中から聞こえる。怪訝に神楽は眉をひそめた。

RRRRR……！

不気味なまでに静まり返った夜の空気に鳴り響く電話。慎重に、神楽はドアノブに手を伸ばした。

ギツッ……

やる気も根気もなく、呆気なくドアが開く。廊下の蛍光灯が、ドアの隙間から中に光を差し込む ドアの間は闇。

やっぱり妙だ。

電話はまだ鳴っている。誰かが取る気配はない。

開いたドアから中を窺い、神楽はその瘦躯を滑り込ませた。踏み込んだ足下でフローリングが軋む。肌にまとわりつく、嫌な空気だ。

銃を構えたまま、神楽は短い廊下を進んだ。薄闇の飽和するワンルームは質素なものだ。壁に沿って家具らしい影があるが、テーブルもなければベッドも見当たらない。神楽と向かい合う、ベランダにつながる窓には厚手のカーテンが締められており、隙間からは、隣接したラブホテルの無駄に派手な電飾が映る。黒暗々たる空間　味気ないフローリングの床に窮屈そうに、原色の光の筋が伸びていた。

電話は部屋のちょうど真ん中に置かれていた。着信音とリンクして、ダイヤルキーが明滅している。そのとなりに何か、闇に盛り上がる影を見付けて目を凝らす。

RRR…！　ガチャッ……

電話が静まった。

『ただ今、留守にしております。御用の方は、ピーという発信音の後にメッセージを……』

闇に目が慣れる。眉間に浮かんだしわが深くなる。神楽の見知った顔横たわったそれはスーツを身に付けていた。

『ピ』

神楽より10センチほど背の高い、180センチの大柄な男。整髪という言葉と無縁なぼさついた髪。

『ようこそ、誰かさん』

眉間に穿った銃痕を確認した神楽の耳に、ボイスチェンジャーの不快な声が飛び込んだ。

『人を尾行するのはいいけどね、少しは向き不向きを考えた方がいい。そこに転がっている男は役に立たないクズだったよ』

グリップを握る手が力む。

『しかし、ここまでだね』

ピッ。

ボイスチェンジャーのため息に呼応し、周りの闇の中に赤い光の点が一斉に灯った　部屋が爆弾だらけだった事に初めて気付く。

「畏か……！」

舌打つ。

『GAME OVERだ』

ボイスチェンジャーの声が弾けたように笑い出す。

逃げるいとまもあらばこそ。

神楽の網膜を閃光が灼く。

安アパートの一室から轟音と爆炎が上がった

Today

「被害者は2人だけ？」

昨晚降っていた雨は降るだけ降ると、朝日が昇るや空を太陽に明け渡した。昨日の暗雲は風に吹かれたか、その残骸とも思える雲が少し残っているだけで、空は青かった。蒼を仰いでいた彼女は、顎を引いて視線を目の前に引き寄せる。彼女の眼前　瓦礫と化したアパートは、見事なまでに周囲に被害を及ぼさなかった。瓦解したのはアパート1棟のみ。隣接する建物はすべて無傷に近く、被害者は2人だけ。

しかし田樹川里亜にとつて、そこが最も問題であつた。

18歳という年齢にして、綺麗に成熟し、すっかり整った相貌。172センチの長身を組み、すらりと伸びる四肢は細身と呼ぶよりも華奢と形容するに相応しい。レザーパンツとジャケットを着て腕を組み、瓦礫の山とそこに群がる鑑識員を見つめる彼女は苛立ちを隠そうともしなかった。

「アパートの住人は？」

八つ当たり気味に、里亜はとなりに立つ男を睨んだ。

「そういきり立つな。どうやらこのアパート、正式な住人という者が存在しないんだ。おかげで不法滞在者の巢窟になっていたわけだが　爆破が起った時、偶然にも誰もいなかった」

双前章二。50歳を目前に控えた彼は、スーツの裾にできた小さなシワをしきりに気にしている。中年太りで重そうな体軀、歳相応にシワの刻まれた顔は人当たりが良く、ケイオス・シティ本庁特務捜査部　課課長という肩書きを持っているとは、すぐにはわからない。

ちなみに、豊富な白髪は植毛処理の効果である。

「そのシワ、どうしたの？」

上司に対する口調とは思えない里亜の問い。

「久しぶりにラッシュ通勤したら、ものの見事にシワができた」

「車は？」

「昨日、出かけると言つた妻が使つてな、廃車になつて帰つて来た」

「奥さんは？」

「ぴんぴんしとったよ。知り合ってずいぶん経つが、あれが怪我してるなど見た事がない」

結局シワを伸ばす事をあきらめた。彼の目元が赤く充血している事に気が付いた。

「目、赤いわよ？」

「ああ、これはちょっとな。ここに来る前に、見舞いに行ってたんだ」

「？　うちの課で、誰か入院してた？」

そんな記憶も心当たりも、里亜にはなかった。

「別の課の人間だよ」

双前の話など初めからどうでも良かった里亜は周囲に視線を配りながら、

「麻薬密売なんて、麻薬取締課に任せとけば良かったのよ」

刺々しく言を発した。

ビル街のど真ん中に位置する現場は区画整備が施され、野次馬がたかるという事態は避けられた。もっとも、周りのビルの窓から好奇に目を輝かせた顔を覗かせる姿は見受けられたが、雑居ビルが密集する地区であるが故、致し方ない。

「武器密輸まで絡んでいるかもしれないんだ、麻取だって簡単に手を出すわけにも行かんのさ」

「融通の利かない連中よね」

「そのための特捜部だ」

「課があるじゃない」

「クセのある事件にや手を出したくないんだよ」

「その見返りが、捜査員2人？」

嘲笑した里亜は横目で双前を責めた。

「部下の命っていつからそんなに軽くなったのかしら？」

「神楽をやられて頭にくる気持ちはわかるがな」

しかし彼は怯む事無くその視線を睨み返し、

「部下をやられた俺だって頭に来てんだ。煮えくり返った腹ん中を見せてやりたいくらいにな」

突き出た自分の腹を指して見せた。

「その肉厚だと、何日もかかりそうよ」

冷ややかにあしらう里亜。

「それまで待つてくれる気は？」

「まったく、ないわ」

6年も見ている相手だ。彼女の即答はわかり切っていた。観念に近い、むしろ習慣となつたため息とそろえて、双前は忠告した。

「十分に気を付けるよ？ 神楽に続いてお前まで巻き込まれたら……」

「いらない心配はするだけ無駄よ」

きびすを返した里亜の耳に彼の声が届く。

「だといいがな」

聞き流して、狭苦しいビル間の区画にあふれた捜査員たちをすり抜けた里亜が『keep out』のテープを跨いだ時、

「 弟くん、巻き込まれちゃったのねー」

どこにいたのか、ひょっこりと目の前に現れた人物。

「夕彩」

織部夕彩。ひよんな事から知り合った、『執行人』である。麻薬にしる武器にしる、密売する時には密売する領地というものがある。それを侵害した物を掃除するのが彼女の仕事。

「どうして夕彩がいるのよ？」

身長170センチの里亜と150センチの夕彩 自然と、屈託のない笑

顔を見下ろす形になる

「私の仕事、知ってるじゃない」

正直、里亜は夕彩のこのテンションが嫌いだ。身長は低いが、レザーパンツとカットソー、ジャケットをまとった体はスリムで、決して丸っこい体格ではない。首元まで伸ばした髪は赤毛に近い。彫りの深い顔立ちから、どこかの国とのハーフのように見えるが 年齢は不詳。

「縄張り争い？」

「すぐそこに車止めてるから、そこで話しましょ？」

破顔した彼女の後ろに付いて行くと、大通りに出たところで堂々と路上駐車する、四角い箱を連想してしまう軽自動車があった。

「路駐するなんて、警戒心ないのね」

鼻歌交じりで運転席のドアを引く夕彩に里亜は呆れた。

「狙われる要素がないもの」

「大した自信ね」

助手席に乗り込んで皮肉。

「だって、仕事上で私の顔を知ってる人なんてそうそういないし。ナンバープレートも、日替わりだしねー」

「依頼人と顔合わせないの？」

意外な答えだった。

「もちろん。ビジネスに『織部夕彩』なんて媒体は必要ないでしょ。依頼人が要求するのは結果」

「いい心掛けだわ」

「当然の考えよ」

シートに背中を預けた夕彩はあっさり答えると、次いで話を切り出した。

「弟君が巻き込まれた爆破事件の事だけど」

「夕彩はどう関係して来るの？」

「今回は縄張り争いじゃないのよ。密売グループの1人が単独でクスリさばき始めちゃって。私の仕事は、そいつの鎮圧」

「じゃあ、ビルの爆破事件って」

「そいつの仕業」

「そいつ、今どこにいるの？」

里亜の目元が陰しくなる。

「わっかんない」

バックミラーを調整しながら、あっさり言ってくる。里亜の左眉が跳ねた。

「居場所を突き止めたと思ったら爆発してるんだもん。びっくりしたよ」

あははと笑う彼女に対する衝動を、里亜は止められなかった。右手が夕彩の胸倉に伸びる　ギツ　シートが軋む。夕彩の右手が動く。

「ふざけてんじゃないわよ」

夕彩の胸倉を引き寄せた里亜の左頬には、

「暴力はいけないと思うの」

セリフとは裏腹に、夕彩のマグナムが銃口で口付けていた。

「弟くんが巻き込まれて苛立つのはわかるけど、頭に血が上ったままで何ができるの？」

「あんたに何がわかるっての」

「何もわからないわ」

里亜の眼力を、文字通りに目と鼻の先で受け止めてもなお、夕彩は微動だにしない。

「何もわからないヤツにあれこれ言われたくないのよ」

「何もわからないからこそ言うんじゃない。少し頭を冷やさないよ」

里亜は答えなかった。頬に当たるマグナムは冷たい。しばらく睨みあっている内に

「バカバカしい」

鼻で嘲笑した里亜が先に、振り払うように手を離れた。

「同感」

言い、夕彩もマグナムを下ろすと、一見ヒップバックにしか見えないホルスターにしまった。

「もつと早く気付くべきよ」

嫌味つたらしく襟元を正しながら唾棄する。

「夕彩は、これからどうするつもりなの？」

バックミラーで後ろの様子を窺いながら、聞くだけ無駄な質問を投げる。

織部夕彩は秘密主義の塊である。年齢もわからなければ、普段のライフスタイルもわからない。そもそも、織部夕彩というのが本名である事すらも疑わしい。聞いたところで何も教えてはくれないだろうと踏んでいた。

「あなた次第よ」

「はい？」

「犯人捜し、一緒にしましょ」

予想外な返答に里亜の眉間が不機嫌に寄る。ガチャッ　ドアロックとエンジンのかけた夕彩は有無を言わせぬ勢いで車を発進させた。

「つつジョーダンじゃない！　あんたと手を組むなんて！」

「抗議したって無駄よー。もう決めちゃった事だもの」

「あんたが勝手に決めてんじゃないわよ！」

「シートベルトくらい締めなさい」

里亜の抗議なんてまったく意に介さず、青信号をくぐる夕彩。

「あんたねえ！」

余裕綽々の体に里亜の堪忍袋の尾は早くも限界にまで張り詰め

「それに」

目の前に夕彩の人差し指が突き付けられた。彼女は笑顔のまま、

「密売ルートに詳しい人間がいた方が何かと便利じゃない？」

横目での発言に、さすがの里亜も語を詰まらせた。

「っ……」

「密売ルートに関して私は詳しい。鎮圧の際には、銃の腕の立つ里亜がいれば頼もしい。すでに利害は一致してると思うけど？」

悔しいが正論だった。反論できぬまま大人しくなった里亜を一瞥し、続いて言い放つ。

「そんなくらい頭動かさなさい。バカじゃないんだから」

殴りたかった。

ケイオス・シティ伍番街は高層ビルが建ち並ぶだけでなく、道路が複雑に絡み合っている。あまりの複雑さに、もはや乱雑の域に達していると表現した方が適切かもしれない。いたずらに都市開発したそのしっぺ返しが、道路迷宮という異名である。屹立するビルも同様に、誰も把握しきれないほどに展開されたビル街は、そのせいで、先の件で爆破されたビルのように、不法滞在者にとってのパラダイスを築く事となった。彼らを雇う営業者（社）までもが裏で発展し、いまや何でもあり状態。現状を打開する術を、警務機関であるケイオス本庁は未だ見つけられないままにいる。

「これ、どこに向かつてるの？」

先程からずっと走行中の車にいい加減飽きてきたところで、里亜は口を開いた。ラジオを付けた夕彩は、DJが選んだ今週の1曲とやらを上機嫌に鼻歌交じりで聴き入っていた。

「夕彩？」

「本庁の人間は、今回の事件をどう見てるの？」

見当外れな上にこちらの質問を無視して聞き返した彼女を、眉根をひそめた里亜は不機嫌に睨んだ。

「こつちが聞いてるのよ」

「その前に、本庁の動向を知っておきたいの」

初めて出会った時もそうだったのだが、このマイペース振りには相も変わらず頭痛を覚える。コミュニケーションを図ろうという意思がまるで伝わって来ない。これなら、訓練された盲導犬の方がよっぽど、お互いに歩み

寄れるだろう。

「知ってどうするのよ？」

「情報として持つときたいわけよ」

「外部の人間に教えるわけにはいかないわ」

「このまま道に迷ってもいいのよ？」

よくわからない脅しだが、このままでは一向に話が進みそうにない。ここは里亜から折れるのが賢明だと考えた。夕彩に聞こえるよう大きくため息をついてから、ジャケットの内ポケットから電子手帳を取り出した。

「初動捜査として、まずは爆破されたアパートの管理人を探してみたいね」

この電子手帳は捜査員全員に持たされており、各人がそれぞれの捜査状況を入力する事によって、全員の電子手帳に送信できる。ネットワークとして、捜査員全員が情報を共有できるシステムだ。

「管理人の割り出しながら無駄でしょー。あそこらのアパート、架空名義でいっぱいだと思うし」

夕彩の指摘は、里亜も同感のものであった。そこから犯人への糸口を見付けられるとは思えない。

「そもそも、今回の事件に里亜がいるってのも、私には意外なんだよね。神楽くんも里亜も、特捜 課でしょ？ 課か麻取が出て来るもんじゃないの？」

平然と聞いてくれる夕彩に里亜は苦虫を噛み潰した。

「それが組織つてもんなのよ」

口調には我知らず侮蔑が込められる。

「麻取は麻薬しか取り締まれない。 課はややこしい事件には首を突っ込みたくない。ベルトコンベアを眺めてる心境よ。ヤツらが手を付けなかった事件は、 課の前まで流されてくる。厄介な事に、 課にはそれらを見捨てる事が許されてないの。手元に流れて来た事件は、どんなに困難だとしても手を付けざるを得ない」

「うわっ、融通つてもんはないの？」

奇しくも、夕彩の言葉は里亜の胸中と同じだった。

「本庁の動向はこんなところよ。早い話、なーんもつかめてないみたいね」
早々と電子手帳を閉じてジャケットにしまう。

「そんなんじゃ、犯人捕まえるのに何年もかかったらうね」

鼻先で嘲笑する夕彩を、里亜は苛立たしく思った。里亜が聞きたいのは嘲笑なんかではない。彼女にわざと話を引き伸ばされているように思えて来る。「で？」

胸中の苛立ちは彼女の声音を刺々しくさせた。

「これからどこに向かうのか、教えてほしいんだけど」

「友だちのどこ」

「友だち？」

あつさりした口調で飛び出した夕彩の単語は、不審を里亜に抱かせた。

「独自の情報ネットワークを持っていて、いろんな情報に精通してる人」

「情報屋って言いなさいよ」

回りくどいその言い回しは、里亜が嫌っている彼女のクセの一つだ。その指摘にはまったく触れる事もなく、彼女は語をつなぐ。

「彼だったら、何かしら情報を持ってると思うの。オールラウンドでネットワークを張ってる人だから、何らかの手がかりは見つかるでしょ」

まるで大船に乗っているような、能天気な物言いである。

「そんなに簡単に行くもんかしら」

露骨に軽侮の念を盛り込んだばやきは、赤信号にたやすく負けた。

「あちゃー。だからこの街は嫌いよ。ゆっくりドライブもできない」

辟易のため息と一緒に夕彩の足はブレーキを踏み付けた。発言が流され、初めからないものとして扱われている事も気に食わないが、それ以上に気に食わない事を里亜は口にした。

「夕彩」

「うん？」

「私の話ばかり聞いてないで、そっちの話も教えなさいよ」

「こつちの話？」

ハンドルに顎を乗せた夕彩は、信号を睨み付けながらすつとぼけた（少なくとも、里亜はそう感じた）。

「夕彩が動いている事よ。ビルの爆破事件の犯人がどんなヤツか知りたいの。知ってるんでしょ？」

「知ってるよ」

とつととしやべれ　里亜の苛立ちは、危うく沸点を越えそうになった。

「教えて」

「さつきも言ったじゃない。密売やってる所のヤツが単独でクスリさばき始めちゃってそいつを鎮圧しろって……」

「そいつは誰なの？」

語尾を待たずに質す。

「犯人に関する直接的な話が聞きたいのよ。あんたの仕事内容なんかの話じゃなくて」

「ああ、犯人自身の事？」

夕彩の目だけが里亜に向いた。その猫背を蹴り飛ばせられればさぞかし痛快な事だろう。

「そう言ってるでしょ」

返事するだけでも億劫だった。浮かぶ眉間のシワが、里亜の怒気を深く刻む。

「**額谷浩式**ってのが名前。27だか8くらい、だったかな？ 言ってみれば単なるチンピラよ」

横断歩道を渡る、人の列を眺めながら呟かれた夕彩の声音は、里亜に違和感をもたらした。故意に抑揚を省いたような、低いトーン。信号を上目遣いで見つめる彼女の横顔。

「チンピラならチンピラらしく、どうして集団の中でじっとしてられなかったのよ？」

歩行者用信号が点滅する。業務に忠実なだけの機械を、何とはなしに里亜は見つめた。

「自分で売りさばく方が、収入が多いからでしょ。上の人間に吸い上げられる金が少ない分、より安価で売りさばけるし」

「けどさ」

感じた疑問を提示する。

「上の人間がいなくなるって事は、クスリを仕入れるパイプもなくなるって事じゃないの？ 最初っから独自のパイプを持っているのならともかく、チンピラ風情がそれを持つてるだなんて考えにくいし。いくら安価で売りさばけて客を取れたとしても、よ？ パイプがなけりゃ、手持ちのクスリだっていつかタマ切れになる。そんな的要領悪いだけじゃない」

頭上の信号が青く点り、緩やかに車体が前進する。

「そこなのよね」

いつの間にかハンドルから顎を離していた夕彩が、こめかみを掻きながら呻いた。何らかの答えを持っていると心のどこかで期待していた里亜は、それほどではないにせよ、肩透かしを受けた気分だった。

「ポコポコ出てくるものじゃないんだから、いつか手持ちがなくなるってわかるはずなのよ。それもわからない、よっぼどのバカなのかな」

「その所、夕彩なりの考えはないの？」

「私の？」

「そう」

「私への依頼は頼谷浩式の鎮圧だけだもの。それさえ遂行すればいいんだし、仕事柄、迂闊にしゃばって首を突っ込んだりでもしたら、墓と命が大量に必要なになるのよ。疑問を感じても、立場上動く事は許されないのよ」

きつぱりとした物言いで、夕彩は鼻を鳴らした。

なるほど。

里亜の中で、予感めいた何かが輪郭を露わにする。まだぼやけて不鮮明な部分が多いが、いずれ見える時が来る。

「それで、私と組むなんて言い出したのね」

夕彩の横顔に、質問と言うには直球過ぎる言を投げ付けていた。

「？　どういう事？」

眉を上げて丸くなった瞳が、ちらと里亜を一瞥。ラジオから流れる音声が、交通情報に切り替わった。唇を突き出して首を傾げる夕彩を、探るように睨む。

「ま、とぼけるつもりならこれ以上は追求しないわ」

「とぼけるも何も」

「その代わり」

弁明を鋭く遮る。

「すべてが終わった時　その時は、力づくでも話してもらってからね」

言い切った先には、反論も弁明も返って来なかった。肩をすくめた夕彩は、ため息だけをついた。

キツ　入り組んだアスファルトを軽快に駆けていた車はやがて路地裏に滑り込むと、つまずくように停車した。

「もつと丁寧に停まれないの？」

停車時にシートベルトが食い込んだ胸をさすりつつ、里亜は不平を漏らした。

「車なんて走れりゃいいでしょ。ブレーキだって止まるためなんだから、丁寧じゃなくても十分」

詫びる気もなければ改める気もないらしい。シートベルトを外して、夕彩はドアを開けた。呆れながら、続いて里亜も外に出た。大通りからビルの縫い目に伸びる路地裏は、背の高いビルに挟まれているせいで陽が当たらず、ひんやりとしていた。車1台分の幅を保つ道の先には、塗装が剥がれヒビも目立つビルの壁がそびえ立つ。右手のビルの換気扇から噴き出す、熱気を含んだ油の匂いに顔をしかめた。

「中華料理屋がこのビルにあるの。評判いい店なんだけど、ひどい匂いだよね」

突き当たりのビルに向かっていている夕彩が振り向いた。

「嗅ぐだけで胃がもたれそう」

大股で熱気から逃げる。夕彩に追いついた里亜は、彼女が指差した先に1枚のドアを見付けた。『B2』とだけ印字された木製のそれは、卑屈なほどに陰気な佇まい。

「ここがそうなの？」

情報屋との待ち合わせには打って付けな空気が、ドアからだけでも窺える。

「そうよ」

これからショッピングにでも行くような口振りで、夕彩はドアを引き開いた。

ガコガコッ。

あまりに鈍く鳴った音を辿って見上げた里亜は、思わず啞然とした。ドアの上にぶら下がるカウベル 何がどうなって、こんなにも不躑躅な音が出るのだろう。

「いらつしやい」

壁をくり貫いて作った棚にランタンがぼんやり灯る。必要最小限に抑えられた照明の奥で、場にそぐわぬ涼しいテノールが迎えてくれた。

「客のいないバーって、意外と居心地良いのね」

「あと2時間もすれば、夕彩も驚くほど客でいっぱいになるよ。ま、普段がどれほどの盛況なのかなんて、知ってるよね。来た事あるんだし」

すべてのイスがテーブルの上に乗せられているせいで、とても広く感じられるフロアの中央　バーテンダーの制服を少しだけ着崩した青年は、モツブ片手に微笑んだ。えくぼのある、子供っぽい顔立ち。身長は里亜と同じほど。20代前半と思しき青年の瘦躯は、店内の空気に十分合っていた。

ふと、彼の目が里亜に滑る。

「今日の連れは女の人なんだ？」

鼻梁が高く、彫りの深い顔には青みがかった双眸。

「仕事仲間なの。田樹川里亜さん」

強引に巻き込もうとしてるだけじゃない　胸中の言葉を吐き出すのは控えておいた。

「板良クリスです」

自己紹介と一緒に差し出された右手を、里亜は快く握った。指が長く、大きい彼の手は冷たかった。

「夕彩が女の人を連れて来るのって珍しいね。営業中は彼と来てるけど彼は元気？」

店の奥に設置されたカウンター席に2人を促したクリスは、カウンターに入るとグラスを2つ出した。

「彼なんていたの？」

丸イスに座るや、里亜は意外を口にした。

「いちゃ悪いの？」

何故かふてくされる夕彩。

「こんなものしか出せないけど」

彼女をなだめるでもなく、クリスはオレンジの液体を満たしたグラスを2つ、テーブルに出した。あらかじめ差されたストローに口を付ける。喉元を通った微炭酸のオレンジソーダは、思った以上に味が濃く、

「あ、おいしい」

くどくない、すっきりとした後味。感想が素直に口から出た。

「彼はいつも通り。いつかみたいに2人で飲みに来たいけど」

肩をすくめた夕彩はオレンジソーダを口に含んで、

「その時は、何かサービスしてね」

「喜んで」

冗談めいた夕彩の無邪気な笑顔と、えくぼを浮かべて快諾するクリスの微

笑。

ふいに。違和感のような、正体の見えない何かを感じ取った　ような気がした。どこか腑に落ちない、胸元のざわめき。悪夢の予兆とは違う、夢の予感　頭に浮上したイメージに、里亜は頭をひねった。どうして夢の予感という単語に辿り着くのか、我ながらさっぱりわからない。たかが、バーテンダーと客の談話ではないか。

「　悪いんだけど、今日はあまり時間がないんだ」

控えめなクリスの言葉が、里亜の思考を止めた。

「開店まで、まだ時間あるのに？」

腕時計に目を落とした夕彩の眉が上がる。

「今日は貸切の予約が入ってるんだ。となりのビルにある中華料理店が、料理持って来ての大騒ぎ」

ついさつき浴びた油の匂いを思い出し、里亜の顔が歪む。

「そんなの、自分たちの店でやればいいのに」

胃液が煮立ちそうになるのを抑えながら、夕彩の不平に首肯する。

「うちのバーテンが今度結婚する事になったんだけどね、その相手が、中華料理店のコなんだ。今日の宴会は、そのお祝い」

「へー」

夕彩の瞳が大きく輝く。

「2つの店で結婚祝いだなんて、なーんて豪華な」

「結婚ねえ」

過剰に輝く彼女の瞳に呆れ、里亜は頬杖をついた。大した反応を示さなかった事が不満だったらしく、夕彩は顔を突き出して。

「里亜って結婚願望ないの？」

「少なくとも、夕彩ほどはないわ」

「里亜っていくつだったけ？」

「18よ」

「あー、それじゃまだ無理か」

「何がよ？」

ため息交じりにテーブルに伏した夕彩を睨み付ける。どこか見下した語感が癢に障った。

「だって、まだ結婚に実感なんてない年頃じゃない。私くらいになっちゃう

と何かとまとわり付いて来るもんなのよ」

切実さすら感じさせる夕彩の横顔。

「夕彩っていくつだっけ？」

「内緒」

唇を尖らせた彼女から視線を転じた先で、クリスが苦笑した。

「夕彩は結婚したい？」

里亜が聞くや、彼女は勢い良く身を起こした。首ごと振り向いたその瞳は真剣そのもの。

「すっげー、したい」

切実を越えもはや切迫の表情である。何故そこまで思えるのか理解できず、里亜は唇をへの字に曲げた。

「だったら結婚しちやえばいいじゃない。彼氏いるんでしょ？」

当然の事を言っただけだった。彼氏がいるのなら、とっとと籍を入れてしまえばいい。それだけの話だ。

「あつと……」

しかしながら、夕彩の反応はまったくつきりしないものだった。ついさっきまでの勢いはどこへやら、視線があらぬ方向へ飛ぶ。

「うん…それは、まあ。そうなんだけど、ね」

目に見えて意気消沈した夕彩は、しおらしくストローをくわえた。彼女の不自然な変化は、怪訝を覚えるには十分すぎる。頭の中で何かが引っかかる。未消化物が、胃袋にいつまでも残っているような気持ち悪さ。感覚でしかないそれは、明瞭な輪郭としてはつかめないものだった。

「たびたび悪いんだけど」

言い難そうに割って入ったクリス。そう言えば時間が限られているのだっただ。

「あ、ごめんごめん。早速本題に入らなきゃね」

顔を上げた夕彩の口元は急に滑らかになった。

「じゃ、頼んどいた情報ちょうだい」

予想はしていたが 夕彩の差し出した手はクリスに向けられている。彼が情報屋であるのは良しとして、里亜に映る2人はそれ以上に距離が近い。情報やとの間には必要以上に近づかないよう距離を保っている里亜にとって、それは奇異なものだった。

「頼谷浩式の動向について、だったよね」

ようやく本題に入られた事で得られた安堵が、クリスの口調から容易に汲み取れた。

「彼について言えば、ここ最近で突然有名になった人物だよ。理由はもう知ってるね。ストリートの人間からすれば、安くクスリを提供してくれるパイプだ、ずいぶんと歓迎されてる。その反面、密売でさばいているいくつかのグループからは、当然のように良く思われていない。ついこないだ、それ絡みで殺傷事件があったんだ。このまま行けば、夕彩が出るまでもなく頼谷浩式はどこかのグループに処分されるだろうけど」

故意にクリスは語を切った。問いかけの代わりに、夕彩へ視線を投じる。

「悠長に待つてられるくらい、私の仕事は気長じゃないの」

微笑んだ彼女の答えは、彼の期待していたそれだったようだ。満足げに頷くと、再び口を開く。

「さっき言った殺傷事件は、ストリートでクスリをさばいていた人間が密売グループの人間にやられた事件だ。さばいていたのは頼谷浩式のまったんだったわけだけど、今わの際にそいつが漏らした彼の居所は、売春に使われているどこかのホテル。グループの人間は血眼になって、ストリート中のホテルを探し回ってるのが現状だよ」

「ホテル？」

喉に異物感　引っ掛かりを感じた里亜は眉根をひそめた。

「何か心当たりある？」

夕彩に聞かれ、首を左右に振る

「神楽が突き止めた場所は安アパートだったのよ。ホテルなんかじゃなくて」
「それ、半分当たり」

バーテンダーという職業柄ではなく生来のものなのだろう、クリスは人当たりのいい笑顔を浮かべた。

「半分？」

言葉の意味するところに行き着けず、夕彩が問うた。そ、と短く頷いた彼は里亜と夕彩の顔を交互に見比べ、

「ここら一帯に屹立するビル郡が、無謀な都市開発の成れの果て　膨大な粗大ゴミの山だったのは知れてる事実。取り壊すにも1棟2棟という話じゃない、費用がバカにならないくらい　いや、バカみたいな額になるもんだ

から、今日まで何の手も付けられぬまま放置されてる。おかげでビル街は無
法地帯。混沌とした世界が生まれ、拡大が続いて……」

「クリス」

唐突に夕彩が制した。

「何？」

中途半端に止められ、彼はいささか気分を害したらしい。

「話が長いってさ。要領を得ない話、嫌いなよ」

「あ、なるほど」

夕彩が示した里亜の表情　辟易した顔を見て、クリスは空咳に喉を震わ
せた。おずおずと、

「ごめんなさい」

頭を下げた彼に、里亜は話の先を　要点の提示を促した。

「つまり、瀬谷浩式はどこにいるの？」

「ビルだけならここいらにはそれこそ、吐き捨てるほどある。要するに
とん。どこから取り出したのか、人差し指と中指の間に挟んだマッチ箱を
テーブルに置く。軽い音がした。」

「この街では、看板だけがホテルを示しているとは限らないって事」
マッチ箱には『ARCADE』とだけ、記されていた。

「もう使われていないビルをホテルとして再利用とはまた、この街らし
い発想ね」

「夕彩は仕事柄、そういう情報には事欠かないと思ってたけど」

「そういう噂は耳にした事あるけどね。そんなとこに踏み込んだ事なんてな
いの。これ本当」

「意外」

「里亜はあるの？」

「あるわけないでしょ」

里亜は吐き捨てた。

「ふうん」

気なんてまるで感じない生返事で鼻を鳴らした夕彩は、ビニールを破った
ばかりの野菜サンドイッチにかじりついた。かすかだが、車内にレタスの匂
いが漂う。とうに日は暮れた。100円パーキングの看板が、白いだけの光

でもって地面の砂利を灰色に浮かび上がらせる。出入り口以外の3方向をビルに囲まれた敷地には、彼女らの車しか見当たらない。5台分のスペースには、寂寥感しかなかった。

「ぱつと見、ただの雑居ビルね」

駐車場と、アスファルトを挟んで向かい合う鉄筋コンクリート五階建て。クリスから目印として聞いた、1階のテナントに入るコンビニエンスストアで、小腹が空いたと夕彩が買い物したのが5分前。ビルの二階から上 何の変哲もない住居テナントがホテルらしいのだが。

「何も、動きなんてないよね」

パンに挟まれたトマトだけを器用にくわえ、夕彩は咀嚼。彼女の言う通り、何も動きがない。道路側 里亜たちから見える窓の列は思い思いに室内の明かりを映し、生活感しか窺えない。

「もしかして」

胸中で動き回る不安を、里亜は口にした。

「クリスの情報ってガセだったんじゃない？」

「いや、そりゃないね」

と言ったのだろう。実際に里亜の耳に入っただのは、サンドイッチを目一杯頬張ったままで発された、こもった音吐でしかなかった。

「彼は信頼できる？」

何度も頷きながら咀嚼する夕彩は、口の中の物を飲み込み終わると、自信満々に断言した。

「クリスは私にウソつかないもの」

「情報屋をそこまで信じられるものかしら」

「情報屋がウソ言ったら商売にならないじゃない」

「夕彩を陥れようとしてるかも」

「ないない。クリスはそんなヤツじゃないのよ」

彼への信頼はよほどのものらしい、頑なに言い張る。胃袋へと消えたサンドイッチのビニール袋を握り潰した。

「飲む？」

コンビニの袋から取り出したのは野菜ジュース。織部夕彩がここまでの野菜好きだったとは初めて知った。

「いないわ」

そういえば、彼女と初めて出会った時も、こうしてパックの野菜ジュースを飲んでいた事を思い出す。

「そ」

短くそれだけを呟いた彼女は、差したストローを加えた。エンジンを切った車内は静かなものだった。そのせいで、夕彩の唐突な質問は、必要以上に明瞭な響きを携える。

「好きでもない人と寝た事ある？」

あまりにも突然で、素っ頓狂な声を上げるのも忘れ、不覚にも窓に肩をぶつけた。

「いきなり何よ？」

「娼婦っていうのが金を生むのは知ってる。娼婦を囲って宿を経営すれば儲けられるのも知ってる。男とは違って、女の体は金銭的な価値と置き換えられる」

里亜の質問が聞こえないのか、ストローを噛む夕彩は虚ろな瞳でビルを見つめた。何かに憑依されたように、彼女の声は低く、無表情。

「けどそれって、男がそう望むからでしょ？ 需要があるから供給がある。

淫乱って単語は女性蔑視よ。そう呼ぶ男のせいでできたシステムなのに、そんなの忘れて女の上で汗かいて」

「夕彩」

里亜の発した声音は、短くも鋭かった。傾げるように振り返る夕彩の首の上。その双眸は、今にも泣き出しそうに揺れていた。彼女の心など見えやしない。豹変の理由もつかめない。里亜の唇は、夕彩に潜む何かを押さえ込むためにのみ動いた。

「要領の得ない話が嫌いだって、あなた知ってるでしょ？」

「……………そうね」

夕彩の唇の端がつり上がる。笑うというよりも、歪めただけの嘲笑にしか見えない。

「忘れてちょうだい」

「ええ、そうするわ」

事実、それは自嘲だったのかもしれない。

「さてと」

バコッ　パックがへこむまで吸い込んだ夕彩は、すっかりスリムになっ

たそれをビニール袋に入れるなり、後部シートに放り投げた。

「行こっか」

呆れる里亜に文句を言ういとまも与えず、にこやかにハンドルを叩く。

「的外れだったらどうするのよ？」

「行きやわかる」

「強引ね」

「積極的な女だから」

ドアを開けるや、夕彩はするりと出た。猫のように気まぐれで俊敏な動きに、仕方なく里亜も続く。

住居スペースに行くには、コンビニの前を過ぎて迂回し、ビルの裏側に行かなくてはならなかった。昇降口は、つい最近に交換したばかりなのだろう、天井の蛍光灯は煌々と照り、一人の男の吐く紫煙をくつきりと浮かび上げさせる。背丈は里亜より低い、黒のスーツから窺える体格はがっしりと大きい。コンビニのビルと不釣り合いな屈強な男は、里亜と夕彩を視認するなり眉をひそめた。

「客もいねーのに、来んなつつつたる」

里亜と夕彩は顔を見合わせた。肩をすくめる夕彩　視界の隅に、目張りされて並ぶ郵便ポストを捉える。アルミ製のそれにはブルーのスプレーで書き殴られた文字　ARCADIA

「とつとと客つかまえて来い」

しっしつと手を払う男に、やおら夕彩は尋ねた。

「コージに会いたいんだけどー」

体をくねらせて猫撫で声を出す。もしもこれが里亜に向けられたものであったとしたら、一抹の躊躇もなく張り倒しただろう。しかし、男に対しては効果的であつたらしい。

「あ？　クスリが目当てか？」

微妙にはあるが、頬骨の張った男の表情が緩む。

アタリ。

夕彩の目配せ。里亜は確信した。

「客取つて来てからな。仕事の後だ」

物事がすべて簡単に行くとは思わない。彼の後ろに見える階段へ通してくれそうにない、こいつをどう片そうか……

「今すぐに会いたいだよ」

ガンツニ

考えあぐねる間もなく、夕彩がマグナムを抜いていた。

「があ！」

撃たれた左腿を押さえたうつ男の脇を、鼻歌交じりに夕彩が抜ける。

「……もつと他にも手はあるでしょ？」

その背中に呟いたが、彼女は振り向きもしない。呆れながらも踏み出した

里亜の足首を、男がつかんだ。

「このアマあ！　こんな事してタダじゃすまねえぞっ！！」

ガンツ！

「ひぎいあ！」

里亜がマグナムを抜く事なく、血管の浮いた形相は悲鳴に歪んだ。手首に生々しく穿たれた銃痕は見るも痛々しい。

「里亜の足首つかむなんて、身の程を知れ」

のた打ち回る男に聞こえるはずもない。振り向いていた夕彩は銃口を払って、

「早く行こ？」

満面の笑みを浮かべた。

「酷な事するのね」

夕彩に続いて階段を駆け上がる。里亜の紡いだ語が気に入らなかったか、彼女は口を尖らせた。

「元殺し屋とは思えない発言」

「じゃ、元殺し屋として言わせてもらっわ。一発で殺した方がうるさくないし、面倒にもならない」

「あはっ」

夕彩の高い声が壁に反響する。

「それ、らしい考えだね。殺し屋らしい言い方」

「元、よ」

「けどね、里亜」

踊り場を抜けると、2階の廊下はすぐ目の前にあった。

「私は執行人なの。殺し屋とは少し違うの」

「言葉の響きだけじゃない」

「だからって、殺せばいいわけじゃないもの」

2 段飛ばしの夕彩が廊下に跳び出た。ジャケットの裾がはためく。

「私、1 つの仕事に 1 人しか殺さない事にしてるの」

「はあ？」

2 歩遅れで夕彩に続く。左手に伸びる廊下はそれほど長くはない。五対のドアが等間隔に並ぶ様は極めて質素である。コンクリート剥き出しの造りの成果、空気はひんやりしていた。

「1 人だけなの」

「どうして」

「執行人だから」

「わけわかんない」

階段の上から慌ただしい足音が聞こえた。どうやらこのフロアはホテルとしてみ使われているようだ。

「里亜」

言及しようとする里亜を制し、夕彩は上に続く階段を指し示す。

「援護よろしく」

「階段で撃ち合うつもり！？」

里亜の驚愕などまったく意に介さぬままに夕彩の足が地を蹴った。逃げ場のない階段に跳び込むなど無鉄砲にも程がある。

「クソがつ！」

悪態をついて里亜は駆けた。マグナムを抜きながら神経を研ぎ澄ます。視界が広がる感覚。グリップを握る指先まで血が通っている感触。

踊り場を蹴り 3 階に駆け上がった

「こつち！」

夕彩の身が翻り、その足が廊下の先に向かう。遅れて廊下に着いた里亜は階段を仰ぎ 銃口と目が合った 考えるより先に体が動く。

ガガガガガガガ！

マシンガンが一斉に吠え火を噴いた。横に跳んだ里亜の足元を銃弾がかすめ、

「里亜！？」

夕彩の悲鳴が銃声に掻き消される。地面を転がった里亜はすぐに体勢を整えた。振り向けば、一瞬前にいた地面は穴だらけ。壁までも露骨なまでに削

れている。銃声は止んだが、足音が近付いていた。

「あ、開いた」

すぐ近くのドアを、無用心にも夕彩が押し開いていた。

「入れって」

他に逃げ道がない以上、とにかくにも身を隠すしかない。彼女を押し込んで己が身を滑り込ませ、音を立てずに後ろ手にドアを閉める。

「うわ、質素だ」

ベッド、小さなテーブル、2脚のイス、これまた小さな冷蔵庫。コンクリート剥き出しの内壁に囲われた部屋は夕彩の言う通り、質素極まりない。スプリングを軋ませベッドに腰を落とした夕彩は、壁を叩いて軽い音を立てた。「これじゃとなりの声が聞こえそうね」

「悪趣味」

壁に耳を寄せ、何やらにやけた彼女をたしなめる。暗く調節された照明に浮かぶ家具のレイアウトを見回し、空気にうつすらと含まれた芳香剤のような匂いに顔をしかめる。

「どこ行った？」

ドア越しに男声が聞こえた。

「どっかに入ってたんだろ」

「何しに来たんだ？ 銃持った女なんだろ？」

「サツか」

「佐伯のところだったら厄介だな」

「どちらにせよ、コージさん目当てだろうな」

佐伯？

どうやら4人だけらしい、潜めた男たちの会話に出た単語は、おそらく夕彩の依頼人の名だろう。頼谷浩式目当てとすると合点がいく。もしかすると、他のグループの人間かもしれないが。

何にせよ、現状をどうにかしなくては。廊下にいる男たちをどう突破するか……

「このままだと、迂闊に出られないね」

言わずとも知れた事を、わざわざ夕彩は口にした。

「わかってるわよ、そんな事」

「ここ、何か変な匂いしない？」

「そんなの関係ないでしょ」

「さて、どうやって出よっかね」

里亜の嘆息が空気をこすった。まるで独り言だ。夕彩には会話をしようという気がないらしい。

「なあ」

「何だ？」

「ここって、ナオの部屋だよな」

「ああ」

「カギが閉まってる」

ドアの向こうで息を呑む気配。同時に、里亜の足元へ何かが飛んで来た。

夕彩が飛ばしたもののらしく、何度も指差すジェスチャーから察するに見て欲しいらしい。屈んだ里亜がつまみ上げたそれは、NAOと書かれた名刺だった。

ズガンッ！！

銃声はドアを突き抜け、夕彩の脇にあった枕に穴を開けた。

「あっさりバレたみたい」

身じろぎ一つするでもなく、夕彩が立ち上がる。

強行突破しかないか。

諦観めいたため息で里亜は腰を上げるや、振り向きざまにドアを引き開いた。

ガンッ！

眼間にいた男の右肩に引き金を引く。

「ぐあ！」

突如現れた里亜と銃声に怯んだ男の左足にもう一発　ガンッ！　左足で踏み込み、崩れた男の顎を蹴り上げる。首が伸び、壁に後頭部を打ち付けた男は白目を向いて地に沈んだ。

「女ア！」

敵意丸出しの怒声が右耳を震わせる。

ガガガッ！

バックステップで部屋に飛び込んだ刹那に眼前を銃声が薙ぐ。

「あっ！？」

里亜の予想は当たったらしい　マシンガンの男が悲鳴じみた声を上げる。

バカバカしい。

至って冷静に、里亜は廊下へ飛び出すやマシンガンの男に銃撃

ガンッ！

弾かれた右肩から血が噴き出しマシンガンが転がった。

「慣れないもんは使うもんじゃないわ」

傷口を押さえ睨みつけて来る、やぶ睨みの男にマグナムを構えたまま、里亜は冷ややかに言った。

「痛えよお」

弱々しい声を振り向く。里亜を挟んだ反対側に、先のマシンガンの流れ弾を食った長髪の男が血まみれになって倒れていた。その向こうでは二キビ面の男が腰を抜かしてへたり込んでいる。げふっ　長髪の男が吐血した。着弾した腹部のシャツは真っ赤に染まり、押さえる手はぬらぬらと光っている。
「な、何者だよ、おまえ」

銃口の先で、畏怖から絞り出す声。睨み付ける目は、しかしすでに戦意を喪失している。

「穎谷浩式がここにいて話をしてたんだけど」

淡々たる里亜の言は男の顔色を変えた。

「誰の差し金だ？」

「誰だっていいじゃない」

今さらになって夕彩が出て来た。虫の息になって転がる長髪の男を気味悪そうに見下ろし、

「穎谷浩式はいるの？　いないの？」

殺意に満ちた瞳を上げた。ゾクッ　彼女の目を見ただけだというのに、

里亜の背筋を嫌な感触が撫で上げる。真っ向から見据えられた男は首筋を引き攣らせ身を引いた。

「もう一度しか聞かないよ？」

「ここにいます」

夕彩を遮ったのは地を這うような低い声だった。階段から現れた巨軀が皆の視線を吸い寄せる。

「苅嶋さん……」

夕彩の視線から逃れられたからか、振り返った男は安堵まじりに呟いた。
苅嶋と呼ばれた男は全身を黒スーツでまとう、2メートル近くの巨体だった。

きれいに剃り上げられたスキンヘッドにサングラス。眉は薄く、強面を一層際立たせる。対して、彼がすっかり襟首を捕らえている男は、どこにでもいそうな優男だった。ジェルで固めているらしい茶色の短髪。パーカーにカーゴパンツと、ダブつかせた服装ではあったが、その細面から察するに体付きは細そうだった。

「こいつが欲しいんだろ？」

苅嶋に軽々と放られ、優男は滑稽なくらい地を転がった。

「うっ」

呻いた彼の目元が腫れている。唇も切れていた。

「そっちの目的はこいつだろ？ リョーセーに向けている物騒なもんは引っ込めてもらえないか？」

苅嶋の言葉に、はっと我に返った里亜は構えた銃を下ろした。目の前の男リョーセーが舌打ちをしたが、聞かなかった事にする。それにしても、だ。

「かくまつてるんじゃないの？」

怪訝に尋ねる里亜を、苅嶋は鼻だけで笑う。

「幼馴染ってだけだ。住居を与えてやっても、犠牲を払ってまでかくまう義理はない。守れなんて吐くもんだから2、3発殴ってやったんだ。ケツの穴を増やそうがミンチにしようが、自由にしろ」

野太い声は重く響く。

「哀れね」

呟いた夕彩に顔を上げた優男 　　穎谷浩式は突然、一縷の望みを見出した

ように歓喜の声を発した。

「ナミ！？」

ナミ？

里亜は振り返った。無表情の夕彩は穎谷を見下ろしたまま動こうとしない。

「ナミ！ 助けてくれよ！」

地べたに転がったまま涙と鼻水にまみれた顔で必死に訴えかける様は、無様で正視に堪えなかった。

「知り合い…なの？」

静かに、夕彩の足が前に出る。呆氣に取られた里亜を過ぎ、呆然とするリョーセーの脇を抜け、穎谷の前で立ち止まる。鼻をすすり、さがるような彼

の目が彼女を見上げた。

「ナミ…っ！」

「たかが3回寝たくらいで、気安く呼ぶなよ」

夕彩の爪先が、彼の鼻頭を折った。

The Last Night

ピッ。

心電図が規則的に高鳴る。潔癖なまでに白い空間には静寂が隅々にまで行き渡り、心電図のリズムだけがわずかに空気を振るう。この部屋がどういったものなのか、1つだけあるベッドに横たえられた男がどういった状況なのか、部屋を埋める大仰なまでの機械を見れば想像に難くない。

ピッ。

男は端正な顔立ちだった。細すぎず丸すぎず、厳選されたパーツをそろえた綺麗な顔。シートから出た腕には点滴が差されている。天井を向いて力なく開かれた左手の薬指には、ピンクシルバーのリングがはめられていた。頬には赤みが差し、ふっくらした唇は女性的な印象を受ける。頬をはたけば、今にも不機嫌な声を出して起き上がりそうなものだが。

「もう半年間、ずっと起きないの」

夕彩の声は絶望的なまでに低かった。

「そう」

ベッド脇に置かれたイスに座る彼女は、とても小さく見えた。瞳にかかりそうな男の前髪を、夕彩の指先がやわらかく上げる。

「穎谷浩式が自供してくれたおかげで、密売グループが1つ、壊滅できたわ。佐伯重工っていう小さな会社。密売で潤っていた割りに、なかなか尻尾出さなかった、しがない会社よ」

部屋の静けさは、里亜には重く感じられた。夕彩は何も応えない。

「あなたの狙い通りに」

何も、応えなかった。構わずに里亜は語をつなげる。

「銃の腕前だけなら、夕彩だってあるじゃない。私の足をつかんだ男の腕を正確に撃ち抜けるほど。私が欲しかった理由は銃の腕なんかじゃなくて、警察とのパイプだった。じゃなきゃ、穎谷を通して佐伯重工を潰せないものね」喉を圧迫するような部屋。静かな息苦しさ故里亜を饒舌にする。

「別に、穎谷じゃなくても良かったんじゃない？ 佐伯重工の人間であれば

誰でも良かったのよね」

里亜の語尾は、まるで初めからなかったかのように静寂に吸い込まれた。

「あなたがうらやましいわ、里亜」

揺れた声音は、それこそ消え入りそうだった。

「あなたには、愛する人を失う恐怖がないもの。みんながみんな、あなたみたいに強いわけじゃない」

夕彩は、露わになっている男の手を両手で包み込んだ。

「人の体って脆弱よ。クスリで脳を壊されてしまえば動く事なんてできなくなるの。脈だってあるのに、こんなにも温かいのに」

「神楽だって、脳を壊されれば死ぬわ」

「けど、爆発に巻き込まれても死なないでしょ？ サイボーグだもの、脳さえ守れば体は修理できる」

彼女の言葉通り、神楽の体は機械でできている。脳さえ破壊されなければ、すぐにでも、何度でも修復できる。実際に彼は今頃、デスクで報告書の片付けに勤しんでいるはずだ。

「彼もね、警察官なのよ」

男のリングを指先で撫でるその手には、同じリングがはめられていた。一緒に行動していた時にははめられていなかったはずのリング。

「密売に加担してる私が、まさか警官の恋人持ちだなんて、笑っちゃうよね」
「変わった恋人ね」

「彼には教えてなかったの。最後まで、私の事を〇しだって信じてた。このリングね、彼にももらったんだけど、サイズが全然合っていないのよ」

夕彩の細い指にはまるリングは指先を下に向けるとスルリと抜け、男の手の平で小さく跳ねた。指先で拾い上げたそれを、再びはめる。

「普段は首から下げてるの。なくしたら困るから」

「代えてもらえばいいのに」

「だって、彼が選んでくれたリングよ？ 代えたら意味ないわ」

「サイズ、合わないんでしょ？」

「里亜はまだ18だものね」

何故か、夕彩の言葉は癪に障らなかった。

「彼は……その……」

「どうしてここにいるか？」

言おうとしたセリフを先に取りられ、バツが悪くなり里亜はこめかみを掻いた。夕彩が小さく笑う。

「らしくないわね。スパツと聞けばいいじゃない」

同感だ。どうして言いよんだのか、自分でも不思議に思う。

「警官だった彼は、偶然にも佐伯重工の実態を知っちゃったのよ。武器密輸にクスリ売買。正義感が人一倍強い人だったのが仇になったの。独自に捜査を始めた彼は、見事にはめられて、クスリ漬けにされた」

小馬鹿にした語感の中に、しかし愛しさが息づく。

「私が出た時には、もう植物人間だったの。両親は早くに他界してたから身寄りもなくなつて、こうして見舞いに来るのは私だけ。最初のうちは同僚も来てたみたいだけど、今じゃさっぱりみたいね。上司なんて見た事ないわ。座り心地の良いイスにかじり付くので忙しいのよ」

「そんな人間ばかりじゃないわ」

「どうかしら」

夕彩は肩をすくめたが、部下を家族のように慕う上司を里亜は知っている。自分の課でもないのに見舞いに行き、ひっそりと涙する中年男を。彼はあの時、ここにいる男に会っていたのかもしれない。

「穎谷浩式って男を夢中にさせるのは簡単だった」

ため息で吐かれた言たちは、彼女の苦痛を内包しているようだった。

「ナミって名乗って近付いて、佐伯の所からクスリを持ち出すようにそそのかして。私の顔なんて知らないチンピラだもの、何の疑いもなくすぐに行動してくれたわ」

すべてを達観しているような、諦観しているような、夕彩の口調は静かだった。

「頭ではわかってた事だけど。好きでもないヤツとやっても、ちつとも良くないのね」

笑い飛ばすにしては夕彩の声は湿っていた。緩慢な動きでその首が振り返る。

「ごめんね」

一体何を謝られたのか、すぐにはピンと来なかった。

「無関係な爆破事件と関連付けて、里亜を巻き込んで」

そうなのだ。神楽が巻き込まれた安アパート爆破の一件は、穎谷浩式とは

無関係だった。しかし

「あの爆破事件も、佐伯絡みだったわ。あのアパートで密売してたのよ。夕彩が動かなくても、佐伯重工は壊滅して……」

「知ってる」

無理やり夕彩は割り込んだ。

「その話、クリスから聞いてたの。爆破した犯人が神楽くんに捕まえられた事も知ってる。里亜と神楽くんが捜査するんだもの、すぐにでも佐伯重工につながるだろう事は予想できたわ」

「だったら何故」

「私の手で壊滅させたかったの」

真摯なまでにまっすぐ見上げる瞳。「私にとって、あの爆破事件は誤算だった。せっかく頼谷浩式を動かせたというのに、まさかあんな形で里亜を巻き込んで来るなんて。里亜に声をかけた時、相当焦ってたのよ。あのまま里亜が捜査しちゃったら、行為がすべて無意味になっちゃう。だから、無理やりにも私と行動してほしかったの」

「焦ってるようには見えなかったけど」

声をかけられた時を思い出す。わずらわしいと思いこそすれ、よもや焦燥に駆られていたとは思いだになかった。

「焦ってたの。結果的にすべてうまく行ったから良かったようなものだけど、どこかで計画がずれたらどうしようって常に不安だったんだから」

肩をすくめ、夕彩はおどけて笑った。

何かが。

里亜の記憶のどこかで、何かが疼く。

「もしもずれてたらどうしたの？」

疼きを悟られぬよう、つとめて平然と問う。きょとんとした夕彩は少しの間だけ虚空を見やってから、再度里亜に視線を戻して笑顔を浮かべた。

「それはそれで、その時に考えてたよ」

臨機応変と揶揄すべきか無鉄砲と賞賛すべきか。どちらにせよ夕彩の笑顔には一点の曇りも翳りも見られない。彼女の中で、すべては完結したのである。もう、ここに里亜がいる必要もない。

「そろそろ帰るわ」

自分でも不思議な事に　里亜は夕彩の頭に手を乗せていた。単に置きや

すかったせいかもしれない。破顔の中に辛苦を見出したせいかもしれない。あるいは、ベッドの男を思っ、かも知れない。サイズの合わないリングのせいかもしれないし、意地でも涙は見せない気丈さのせいかもしれない。

同じ女であるから、でもあるだろう。

同じ女として、でもある。

何にせよ、里亜はきびすを返した。

「里亜」

すぐに呼び止められ、首を夕彩に回す。目を綴じたままの男を見つめる横顔は、思わず見とれてしまうくらい綺麗で、呼吸を忘れそうになった。

「神楽くんにとつて、里亜は生身の人間よ。爆発に巻き込まれたりしたら命を落とすの。彼が怖がっているって事は、憶えておいてあげて」

「……わかったわ」

その言葉はじんわりと、里亜の心に染み渡る。男の手を握り、その頬を撫でる夕彩の微笑は幸せそうで、後ろめたさを感じた里亜は早々に、両開きの自動ドアから退室した

ドアが閉じた。

彼女は身を乗り出す。

瞳を閉じて彼の唇を感じる。

これは、彼の抜け殻。

空虚な『からだ』。

彼女のまぶたから涙が伝う。

ふるえる唇で、メッセージを贈る。

ありがとう。

さようなら

エレベーターが下降する時の、内臓が持ち上げられる感覚。物静かな箱には里亜しかない。ドアの上部に掲げられた、階数を示すデジタル数字の減る様をぼんやり眺める。彼女は、1人の女の事を考えていた。

織部夕彩。年齢は不詳。性格は無邪気で無鉄砲。密売における、ルールを破った者を処分する、執行人。彼女自身の決めたルールは……

ルールは。

ポンッ

軽やかな電子音が、1階への到着を告げる。義務的に開いたドアの向こうは、入院患者たちの憩いの場である。ロビーフロアとして、売店と自販機、L字に並べられたソファが設えられている。ソファで独り、タバコをくゆらせている寝巻き姿の男と目が合った。60過ぎと思われる彼は、エレベーターから出ようとせず立ちすくんだ里亜に片眉を上げる。

構わずに、里亜の指先は『6』と記されたボタンに伸びた。間もなく閉じるドアの隙間で、男が首を傾げたが彼の事など眼中から追いやってしまったうほど、里亜の胸中は騒々しくなっていた。エレベーターが上昇する中、彼女の胸に芽生えた不安は信じられない速度で膨張する。喉元にせり上がった粘着質のそれは、容易に飲み下せるようなものではなく、押し込もうとすればするほど、より一層、喉の裏側に張り付く。自己のペースを保って上昇する箱と、デジタル数字がもどかしい。

ポンッ

他の階で止まる事なく、スムーズに到着できたのがせめてもの救いだった。ドアが開き切る前に里亜は飛び出し、リノリウムの床を蹴っ

『私、1つの仕事に1人しか殺さない事にしてるの』

鼓膜の奥で夕彩の声が響く。空耳だとわかっていながら、彼女の気配を探した。

エレベーターホールから右に伸びる廊下の突き当たり 集中治療室の前で、医師と看護師たちが群がり騒いでいた。

「誰がスイッチを切ったんだ！」

医師らしき神経質な声が飛ぶ。駆け出すタイミングと目的を失った里亜は、その場に立ちすくんだ。

夕彩は、今回の事件で誰かを殺しただろうか？ 爆破事件は彼女が起こしたものではない。標的であった頼谷浩式も、佐伯も殺していない。『1人しか殺さない』という言葉を、『1人は殺す』という意味に変換できなかった。夕彩を信じ切っていたせい、信じ切れていなかったせい。

最悪だ。

慌てふためく医師たちの向こうに、つい先程と変わらずに眠る男が垣間見えた。

最悪だ。

彼の名前を聞いておくべきだった。胸が締め付けられる。

最悪だ。

部屋から駆け出した女看護士が、里亜の脇をすり抜ける。彼女の顔は泣き出すのを堪え歪んでいた。

こんなの、認めない。

胸に巢食った不安は弾けた。

ガンッ！

やりどころのない怒りを拳に、里亜は壁を殴り付けた。皮膚の破ける痛み。失神しそうな怒り。叫びたい衝動。

「こんな終わり方、私は認めないわ」

かすれた声で呟いた。

抑揚を失った心電図の音が、妙に色濃く耳に残った。

「empty body」
Written by nakoso
© nakoso 2009

Release Date 2009/01/10 on Bottle Novel
<http://bottlenovel.blog.shinobi.jp/>

Twitter (as inabetz) :
<http://twitter.com/inabetz>

Mail :
nakosokan@gmail.com



「empty body」 by nakoso is licensed
under a Creative Commons 表示-非営利 2.1 日本 License.
Based on a work at <http://bottlenovel.blog.shinobi.jp/>